

# 若手教師が自信や意欲を持って授業に取り組むには

## － 授業後の生徒指導主事としてのコンサルテーションを通して －

第一発表者 池嶋 一隆  
(寝屋川市立第八中学校)

第二発表者 家近 早苗  
(大阪教育大学大学院連合教職実践研究科)

**【問題と目的】**近年、教育現場では50代と20代の教員の数が相対的に多く、その間の世代の数が少なくなっている(文部科学省 2019)。発表者の勤務する学校では実際に授業を行っている30代以下の教員が全体の8割以上を占める。また、2020年4月のアンケートから本校の約40%の教師が授業に自信がないと感じていることが把握できた。若い教師が多い学校では経験不足による校内研修の不活性化が起きやすいこと(臼井 2016)、職場の協働性が教師の学習指導効力感を高める(貝川 2006)ことから、本研究の目的は発表者の生徒指導主事という立場から、授業力を向上させたいと思っている若手教員に定期的な授業見学とフィードバックを続ける中で、若手教員が授業研究を自信を持って意欲的に行えるようになることである。また、その際、授業をどのような視点で見学し、どのようなアドバイスをすれば授業者の成長につながるかという若手教員へのコンサルテーションの内容を自分の本実践をもとに整理することとする。

**【方法】**期間：2020年8月～2021年5月

対象：大阪府内A中学校の若手教師6名

分析の方法：①A中学校の若手教師6名の授業を週に1回ずつ見学に行き授業メモとその内容をまとめた振り返りシートを作成しそれらを用いて授業者に授業についてのフィードバックを行う。②効果的なフィードバックの方法を明らかにするために、第一発表者が振り返りシートに記入したアドバイスの内容を「どのようなことを伝えようとしていたか」という視点から読み換えたものを意味内容の近いもので分類し概念化する。

### 【結果】

#### ①授業見学について

6名の若手教員に合計54回の授業見学・フィードバックを実施した。現在継続中である。

#### ②フィードバックの内容について

54回の授業の振り返りシートのアドバイスの内容

を切片化し、774項目を得た。それらを意味内容の近い項目同士で整理し、32個の小カテゴリにまとめた。さらに小カテゴリ同士の関係を整理し6個の大カテゴリとした。6個の大カテゴリについては以下A～Fの通りである。尚、小カテゴリについては代表的なものを示抽出した。

#### A：工夫や努力を認める・褒める（4項目）

「授業者の独自の工夫の受け入れ」「アドバイスを活用していることを感じ取る」

#### B：挑戦の後押し（2項目）

「授業者の挑戦を褒める」「授業者の挑戦・工夫の後押し」

#### C：自己認知を促進する（4項目）

「授業者の長所を自覚させる」「授業者の成長を伝える」「授業者の目的を明確化する」

#### D：修正点・改善点の指摘（9項目）

「学習活動の精選を促す」「授業者の癖の修正」「生徒への過干渉を指摘する」

#### E：新しい視点やアイディアの提供（10項目）

「教科の特質とのマッチング」「教材作成についての視点の提供」「生徒の思考過程を意識した教材研究を促す」

#### F：教師と生徒が快適に授業を進めるための土台

（3項目）「授業規律の徹底」「教室環境に気をつかう」

**【考察】**上記6項目について授業者へのコンサルテーションについて、A～Cが①授業者の挑戦や工夫を刺激するもの、D・Eが②授業のスキルを評価・修正するもの、Fが③生徒指導的なスキルに関するものと定義づけをした。授業者にアドバイスをする際には③を土台として①②の2つが相互に作用し合うことで授業者の成長につながっていく可能性があると考えられる。対象の教師からはいずれも自信や意欲がついたというような発言が聞かれるが、コンサルテーションを受けた教師の行動が具体的にどのように変化し、授業研究に影響していくかの詳細については今後検証予定である。本実践は大阪教育大学連合教職員における実践研究を元に行っている。